

# 麻疹 (はしか) と 風疹 (三日ばしか)

## 大人も注意!



### 麻疹 (はしか) とは?

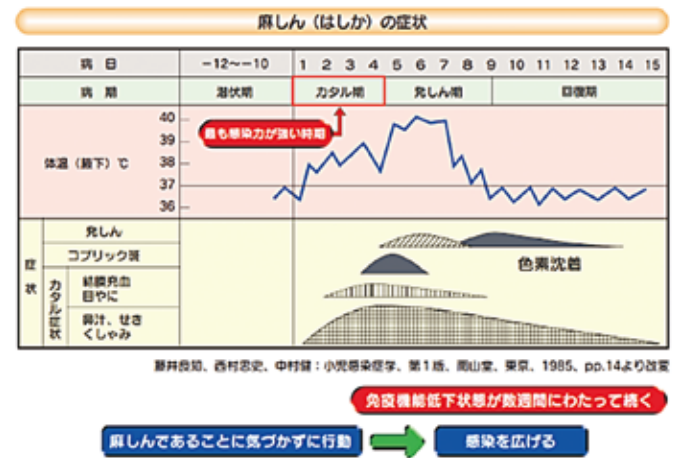
麻疹ウイルス感染によって発症するウイルス性発疹症です。感染経路としては接触感染や飛沫感染だけでなく、空気感染も起こすのが特徴です。感染した人はほぼ全員発症し、不顕性感染(症状が出ない感染)はほとんどありません。

典型的には感染後7~21日(多くは10~12日)の潜伏期間を経て、38℃台の発熱、カタル症状(咳、鼻汁、咽頭痛等)、結膜充血等が出現し、3~4日続きます。この時期はカタル期と呼ばれ、経過中では最も強い感染力があります。発熱出現2~3日後位(発疹出現1~2日前)に口腔粘膜の奥歯の対面にコプリック斑という小白斑点が見られるようになります。コプリック斑は診断的価値があります。

カタル期の発熱がやや下降した後、半日程度して再び高熱(39℃台)となり、それとともに発疹が出現します(発疹期)。発疹は耳後部から徐々に広がり、体、四肢末端まで及びます。発疹が全身に広がるまで39~40℃の発熱が3~4日続きます。発疹は初めは鮮紅色ですが、次第に暗赤色となり、退色していきます。

発疹出現後3~4日すると解熱し、全身状態やカタル症状は改善してきて、回復期に入ります。発疹は少し黒ずんだ色となり(色素沈着)、非常に細かい落屑(皮がむける)が認められるようになります。

合併症がなければ発症から7~10日で回復しますが、その後数週間は免疫能が低下し、各種合併症に注意が必要です。



(出典: 学校における麻疹対策ガイドライン第二版)



口腔内にみられるコプリック斑



顔面にみられる発疹

(出典: 「国立感染症研究所: 麻疹とは」)

### 合併症について

麻疹は自然治癒する疾患ですが、約3割で合併症が出現し、致死率は0.1~0.2%とされています。

合併症としては肺炎、中耳炎、クループ症候群、脳炎、心筋炎などが知られています。このうち、肺炎と脳炎が2大死因です。特に脳炎の致死率は15%以上と高く、回復しても中枢神経系の後遺症を残すことも多いです。

特殊な合併症として数万~10万人に1人の割合で、麻疹発症後数年~10年して亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という重症な脳炎を発症する場合があります。特に1歳未満で発症した場合に頻度が高いと言われています。

また、妊娠中に麻疹にかかると、流産や早産を起こす可能性があります。

### 修飾麻疹

麻疹に対する不十分な免疫を持っている人が感染した場合に発症した軽症の麻疹のことを言います。

典型的な症状を示さないため、症状から麻疹と診断することは困難で、ウイルス検査の結果でしか診断できないことが多いです。

### 予防

麻疹は予防接種によってほぼ確実に予防できます。現在の定期接種は幼児を対象に麻疹・風疹混合ワクチンを1歳児と就学前の1年間(年長児:6歳になる年度の者)の2回接種しています。

医療関係者や保育関係者をはじめ多人数と接触する職業の人達も2回のワクチン接種が推奨されています。また、妊娠を予定している人や、海外渡航の際も2回接種が勧められています。

### 早期発見

現在、我が国の麻疹患者は海外由来のものです。麻疹の初期症状からだけでは、例えばカゼ症候群と区別することは難しいため、麻疹流行地への旅行歴(海外、国内)や麻疹患者との接触歴がポイントとなります。またワクチン接種歴の把握も重要で、できる限り母子健康手帳や診療録で接種記録を確認してください。

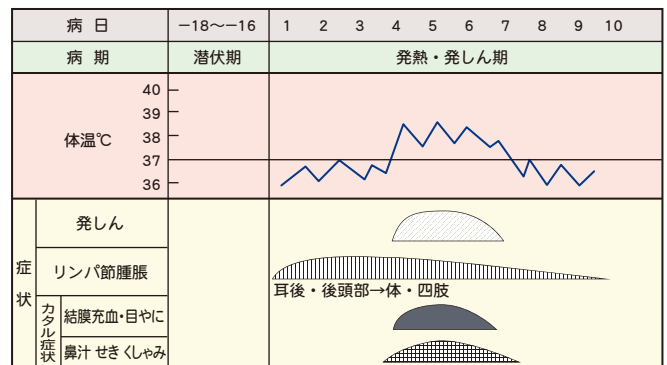
# 風しん (三日ばしか) とは？

風しんウイルス感染によって発症するウイルス性発疹症です。感染者の唾液などの飛沫や接触で感染します。

感染後14～21日（多くは16～18日）の潜伏期間を経て、発熱、紅い発疹、リンパ節の腫脹が認められます。通常はリンパ節の腫脹から始まり、その後、発疹と発熱が現れます。発疹は麻疹と同じように耳後部から出現し、体、四肢に広がります。この順で発疹は3日程度で薄らいでいき、色素沈着は認められません。このため「三日ばしか」と呼ばれることがありますが、「はしか」とは全く異なる病気で、麻疹に罹ったことがあっても、風しんの予防にはなりません。発熱も2～3日程度で解熱します。風しんは症状からだけでは他のウイルス性発疹症との区別は困難です。

感染力は空気感染をする麻疹や水痘ほどは強くありません。また感染した人の内、15（～30）%は明らかな症状が出ないままに治ってしまう不顕性感染があります。

風しん（三日ばしか）の症状



風疹による発疹（成人）

【写真提供：国立国際医療研究センター 忽那賢志氏】



耳介後部リンパ節の腫脹が見られる

【出典：「国立感染症研究所：風疹とは」】

## 合併症について

自然治癒し、予後良好な疾患ですが、血小板減少性紫斑病（3000～5000人に1人）、急性脳炎（4000～6000人に1人）などの合併症が知られています。

成人がかかると子どもに比べて発熱や発疹の期間が長く、発疹が出血性になったり、全身の関節炎が見られるなど重症になることがあります。

## 先天性風しん症候群（CRS）

妊娠20週頃まで（特に妊娠初期）の女性が風しんにかかると、胎児が風しんウイルスに感染し、生まれてくる子どもに異常（難聴、心疾患、白内障、精神身体発達の遅れなど）がみられることがあります。この病態を先天性風しん症候群と言います。

風しん罹患が疑われる場合でも妊娠時期によって先天性風しん症候群のリスクは様々ですから、まず専門医に相談してください。

## 予 防

現在の定期接種は、幼児を対象に麻疹・風疹混合ワクチンが1歳児と就学前の1年間（年長児：6歳になる年度の者）に2回接種されています。医療関係者も2回接種が推奨されています。

先天性風しん症候群を防ぐために妊娠出産年齢の女性に風しん含有ワクチンを接種することもあります。妊娠していない時期に接種してその後2か月間の避妊が必要となります。

男性が風しんにかかると、妊娠中の配偶者（妻）あるいはパートナー、周囲の人にうつし、先天性風しん症候群の子どもが生まれる可能性があります。

過去に風しんにかかったといわれた人も症状だけでは風しんとは否定できないので、母子健康手帳や診療録による予防接種歴や抗体検査での確認をお勧めします。

## 早期発見

流行状況や症状から風しんを疑った場合は、抗体検査で確認します。風しんのIgM抗体検査は多くは発疹が出てから4日以上経たないと陽性になりません。2018年1月から、診断した医師は直ちに保健所に届け出て、麻疹と同じように、全例PCR検査が行われます。風しんは他のウイルス性疾患（カゼ症候群を含む）との区別が困難な場合がありますので、流行地への旅行歴や風しん患者との接触歴、予防接種歴を確認してください。

# 麻しん・風しんが疑われる場合には

## 医療機関

- ・疑い患者の対応にはワクチンの2回接種者が罹患歴のある職員が当たるとともに、疑い患者が他の患者と接触しないようにしてください。
- ・診察で疑われたら、直ちに保健所に届出をしてください。
- ・血清抗体価のチェックとともに、保健所が依頼するウイルス学的検査の検体（EDTA血液、咽頭ぬぐい液、尿）の提出をお願いします。
- ・これらの検査の結果、麻しんや風しんが否定されれば、届出を取り下げます。

## 症状のある方

- ・母子健康手帳でワクチン接種歴を確認してください。
- ・感染力が非常に強いので、事前に医療機関に電話の上、すみやかに受診してください。
- ・受診の際には、可能な限り他者と接触しないように、公共の交通機関などの使用は避けてください。

リーフレットに関するお問い合わせ：広島県地域保健対策協議会事務局（広島県医師会内、TEL 082-568-1511）  
その他の相談、お問い合わせ：最寄りの保健所・保健センターまで